令和５年（2023 年）６月１３日

れきみん

資料館だより

No. Ⅲ－４１

相生市立歴史民俗資料館

〈連載 矢野荘-「中世あいおい」へのいざない-４〉矢野荘の変遷

矢野荘は 1137 年（保延３）に立荘されましたが、以降複雑に変遷しダイナミックな歴史が展開しました。

領域構成の変遷について簡単に示すと、以下のようになります。

◇ 1167 年（仁安２） 別名と例名に分割。別名は美福門院(鳥羽上皇の皇后)御願寺の歓喜光院領に[註1]。

◇ 1221 年（承久３） 海老名氏(関東御家人)、例名地頭に？

◇ 1251 年（建長３） 例名の那波浦・佐方浦は別納に（浦分）。

◇ 1299 年（正安元） 例名が下地中分され[註2]、西方（領家方(預所藤原氏)）と東方（地頭方(地頭海老名氏)）に分割。

◇ 1300 年（正安２） 亀山上皇、別名を南禅寺に寄進。

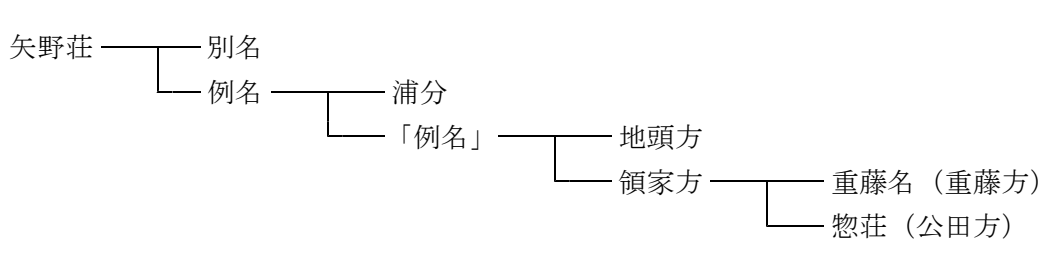
◇ 1309 年（延慶２） 後宇多上皇、藤原氏の預所職没収[註3]。

◇ 1313 年（正和２） 後宇多上皇、例名を東寺に寄進。

◇ 1317 年（文保元） 浦分・重藤名は惣荘に付して改めて東寺に寄進。

重藤名と浦分をめぐっては、東寺と在地領主（寺田氏・海老名氏等）の衝突が繰り返され、重藤名が東寺領化された一方で、浦分については浦分地頭海老名氏の勢いが強く、室町中期までに東寺はその支配を断念したとみられています。

また、東寺による年貢徴収体制下において、領家方は「公田方」（惣荘）と「重藤方」（重藤名）に分けて把握されました。「公田方」は百姓名を中心に構成され、「重藤方」は重藤名を中心に構成されました。両者は一円的な領域ではなく、おおむね散在的に分布していたようですが、使用する桝が異なるなど独自の特徴を有していました（赤松 2015）。



矢野荘の領域構成変遷概念図（赤松2015）

矢野荘が東寺に寄進されてから、「東寺文書」が多く作成されました。またそれ以前の文書も伝存するため、その豊富な史料をもとに戦前から現在に至るまで矢野荘に関する膨大な研究が蓄積されてきました。

現兵庫県相生市域と矢野荘の領域は、ほぼ合致する。
但し、現相生市域内で矢野荘に含まれない地域については相生市境界と矢野荘境界を区別して表示した。
なお、三濃山北方の「二柏野」は現在では相生市域に含まれないが、明治期まで赤穂郡に属し、元来は矢野荘の領域内であった。
本図は、注(2)榎原氏論文、注(3)馬田氏論文を参考に、国土地理院の標準地図情報を用いて作成した。

（註１）御願寺とは、天皇・上皇・皇后・親王等を檀越（だんおつ）とする皇族の寺院で、祈願所・菩提所として設営された。主に９世紀から盛行した。

歓喜光院は、京都市左京区丘崎にあった。

（註２）下地中分とは、荘園の年貢・公事などをめぐる本所（荘園領主）と地頭との相論を解決するために、下地（生産の場としての土地）を分割すること。

（註３）預所とは、本所・領家など荘園領主の代官のこと。

藤原氏が相伝した所職（しよしき）（経済的権益権をもった地位・役職）として、文書上で表現されるのは預所職であるが、藤原氏自身や在地では藤原氏を領家と呼んでいた。

矢野荘における領域構成（赤松2015一部改変）

〈引用・参考文献、図出典〉

赤松秀亮 2015「鎌倉末期播磨国矢野荘の領域構成-重藤名に注目して-」『鎌倉遺文研究』第 35 号（鎌倉遺文研究会）

伊藤俊一監修 2023『「荘園」で読み解く日本の中世』（宝島社）

馬田綾子ほか 1984「中世相生の開幕」「中世相生の展開」『相生市史』第1巻（相生市・相生市教育委員会）

馬田綾子ほか 1986「南北朝内乱の展開」「下剋上の世」『相生市史』第2巻（相生市・相生市教育委員会）

榎原雅治 1999「汎矢野庄の空間構成」『鎌倉遺文研究Ⅱ』（東京堂出版）

高木徳郎 1998「播磨国矢野荘の荘園景観と政所」『悪党の中世』（岩田書院）

（中濱久喜）

学芸員自己紹介

岩見（いわみ）　美佳（みか）　1998 年（平成 10）生まれ

姫路市出身で、大学では西播磨の古墳時代を中心に研究していました。まだまだ勉強中ですが、文化財の保護・保存、そして相生市に愛着をもっていただけるよう歴史と魅力を伝えていくことができたらと思っています。よろしくお願いいたします。